

無限の可能性を持つ女子高等教育： 更なる「たおやかさ」を拓くために

Female higher education with unlimited potentials

若林良和

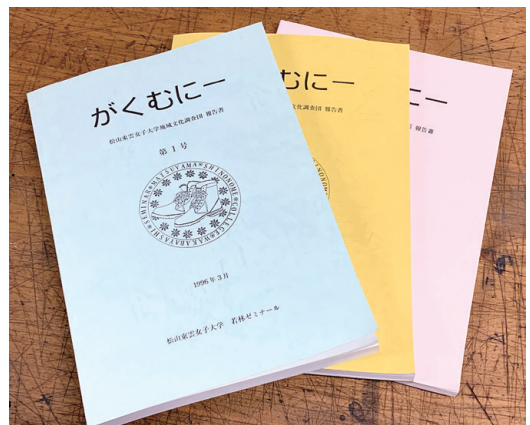
Yoshikazu WAKABAYASHI

(愛媛大学理事・副学長、社会連携推進機構長、松山東雲女子大学元教員)

まず、松山東雲女子大学創立 30 周年、おめでとうございます。創立当初に教鞭をとった教員の一人として、重ねて祝意を申し上げます。その記念として特別寄稿の依頼をいただきましたので、投稿することにいたしました。

冒頭から私事で恐縮ですが、私も定年が近づき、書籍や書類の整理を始めていたところ、松山東雲女子大学（以下、女子大学と略す）の『授業概要 1995 年版』の中から、当時の名刺が何枚か出てきました。その右上に貼られたシールには、「たおやかさを育む」というキャッチコピーが付いていました。私は女子大学設置のための教員として赴任し、開設当初の 5 年間（1992～1996 年）と短期間に限られますが、この言葉を大切に女子高等教育に取り組みました。

この「たおやかさ」には、様々な意味がありますが、私としては、態度や行動がしっかりしている上に、やさしくて、そして、おだやかであると解釈しました。女子大学では、これを醸成する最大の教育手法として、私はフィールドワーク（実地調査）とゼミ（人間文化演習）と位置付けて取り組みました。私のライフワークであるカツオ産業文化研究を手掛けるなかで、当時のメインフィールドの一つであった沖縄県伊良部島へゼミの学生さんを引率し、島でのホームステイをもとにしたゼミ活動と卒論指導に取り組みました。端的な表現をすれば、「人との出会い・ふれあいを出発点に、感性と体験を起点にして学問の世界へ誘う」ということでしょうか。（具体的な実践は以下の文献を参照ください。（1）若林良和「フィールドワークは楽し～沖縄・伊良部島体験から～」『えひめ雑誌』10-3、1997 年 3 月、愛媛新聞社。（2）若林良和ら『マル



【写真】当時の若林ゼミ卒業論文集
『がくむにー』第 1～3 号
(撮影：西村浩子)

チメディアでフィールドワーク』2002年、有斐閣。(3)若林良和『カツオと日本社会』2009年、筑波書房。なお、このフィールドワークをきっかけに、伊良部島の町役場に就職し、島の男性と結婚し幸せな家庭を築いている学生さんもあります。)

ナイスミディとなった彼女らの多くと私の間で、LINEやMail、年賀状、盆暮れの届け物などの交流が現在も続いています。そして、私は、本稿の執筆にあたり、せっかくの機会だと思い、彼女らに約25年ぶりのレポート(?)提出を依頼しました。その内容は、「女子大学で得たものと現在の私」と題し、当時の思い出、今の仕事や暮らしぶりに関することです。彼女らの多くが快く書き綴ってくれました。それを読むにつけて、私は女子大学で教鞭をとったことに深い感慨を覚え、感謝と誇りの念を持ちました。その内容の要約を紹介しながら、私なりに女子高等教育の可能性について考えてみたいと思います。(なお、以下のコメント「」の後のイニシャルは氏名(旧姓)です。)

まず、大学全体に関するコメントとして、「コンパクトな大学で教職員と学生の距離が近く、様々なコミュニケーションをとることができた」(T.K.)、「教員の研究室でお茶をするなどサロンができ、アットホームな雰囲気、和気あいあいとした人間関係が築けた」(S.M.)、「小規模な大学で、学生と教職員との垣根も低く、楽しい学生生活だった」(K.A.)がありました。

次に、沖縄でのフィールドワークに関しては、「島でのフィールドワークは私の人生の宝物。初対面の人との会話のコツを体得した」(S.Y.)、「今、考えても、あのような濃いフィールドワークはなかなか体験できないだろうし、私の人生にインパクトがあった」(K.A.)、「やはり、フィールドワークが一番。人とつながることの大切さや難しさを学んだし、今も島の人たちと交流がある」(K.N.)、「フィールドワークは、それまでの私の人見知りや内向的な性格を変えた、今も思う。コミュニケーション能力のアップの極みだ」(W.H.)というコメントでした。

それから、ゼミ活動のコメントは、「ゼミで一緒に学んだ仲間や先輩、教員との出会いが最高で、しばらく会ってなくても、いつも昔と同じ感覚と関係でいられるのが最高だ」(N.Y.)、「ゼミ活動は、私の受けた教育のなかで、個性やオリジナリティを尊重してもらえた最初の場所であった。今でも、自分の考えを否定せず、他者との折り合いをつけた生き方ができるようになって良かった」(K.A.)、「自分軸を持ち、自責の生き方を育むことができた」(S.Y.)でした。

最後に、改めて再考させられた重要なコメントとして、「今、ライターの仕事をしているが、その基本は学生の時の卒論指導で、それが今も役立っていて、さらなるブラッシュアップに向けて学び直したい」(S.Y.)、「子育てを試行錯誤しながら、子供はキリスト教系の幼稚園に入園した。キリスト教など宗教について再度、学ぶ機会が必要だと感じている」(N.Y.)、「人とのつながりの重要性を、子供たちに言葉以外の方法で伝えていきたいと思っている。これからの人生においても、常に、学びの姿勢を大切にしたい」(T.K.)がありました。

こうした一連のコメントは、あくまで事例的なものに過ぎませんが、人間力の向上促進、そして、学び直しの機会提供という、女子高等教育に関する2つのポイントが浮かび上がってくると思いま

す。まず、適正規模による良好な教育学習環境、そして、人間の五感をもとにしたフィールドワークの醍醐味、きめ細かな人間関係を活かしたゼミ活動など、女子高等教育における人間力涵養の真骨頂がここにもあるといえるでしょう。それから、いくつものライフステージを経過した女性には、これまでの生活体験とキャリア形成を踏まえた、新たな学び直しの機会提供も女子高等教育の一環に資するものとして不可欠だと思います。

言うまでもなく、ジェンダーフリーを前提にして、女子高等教育は人間教育にも通底するほか、ドラスティックに変動する現代社会において、宗教的な情操性と学問的な科学性を基盤とした取組は極めて重要だと思います。松山東雲学園では、県内においてオンリーワンの女子高等教育が綿々と伝承されています。そのこと自体が、最も尊ばれるべきことであり、さらに、今後も大きな発展の可能性を持つものと、元教員として、また、同じ愛媛県内の大学役員としても考えています。

人生 100 年時代を迎え、働き方改革が推進される日本社会では、リカレント教育やリスキリングの重要性は益々、増大していくでしょう。女子大学においても、これまでの教育実践を踏まえ、社会人対象の教育プログラムや講座は、私が在職していた頃から継続的に展開されており、改めて敬意を表します。女子高等教育機関として、同窓生をはじめ地域の女性ステークホルダーに対して、更なる「たおやかさ」を拓くための多面的な取組を期待したいと思います。松山東雲学園の歴史と伝統に培われた強みや特徴を活かした女子高等教育に、私は無限の可能性を信じています。今後、愛媛県における女子高等教育のパイオニアとして、女子大学をはじめとする松山東雲学園には、より一層の飛翔を祈念します。